

## 授業の試みについて

芳 賀 啓

### Abstract

Although it is generally thought that university is a place to give students lectures, the word 'lecture' originally means to interpret the meaning of books. Hence the university should be the place to have the class which contains not only the lectures but also the practice and the experiment together. I was demanded to be a performer in a lecture as a guest professor, but I decided to do a class to rather show learning and awareness of my own.

At first, I was planning to focus on off-campus learning of the student, but their purposes were taking graduation and they didn't participate in class positively nor actively learn. At the same time, lack of literacy of the students was revealed. In order to improve its ability, 'summary exercise' was done at the beginning of the class. Also, I gave them a reading list that gathers what they should read in their life, encouraged the practice of reading it and writing comments as application of the exercise to make their literacy concrete. For me four years of teaching was learning just like as Lucius Annaeus Seneca said 'homines, dum docent, discunt' (Men learn while they teach).

### 1. はじめに

筆者は2015年4月に客員として本学コミュニケーション学部に着任し、「表現と批評1」「地域文化論」を1年間の前期に、「表現と批評2」および「歩く・読む・書く 地図のメディア学ことはじめ」を後期に、都合4コースを担当した（うち、「表現と批評」は1・2とも2コマ連続授業）。各コースの履修生は学年を問わず、人数は年度によって異なるが平均して20名を下ることはなく、コース選択者は年度を重ねる度に増えた。2018年春は前期2コースの履修希望者が100名を超えたが、ガイダンスを経て半減以下となった。

筆者の専門は出版と地図であるが、近年は旧版地形図や古地図を用い地形と水にかかわる

## 授業の試みについて

地域環境をさぐることを中心としてきたため地域研究を専らとする。しかし1960年代末から70年代の学生運動の影響で筆者自身は大学教育をほとんど経験することなく今日に至り、学位も持つことはない。さりながら2006年8月から某私立大学社会教育の場で毎月つづけてきた屋外巡検公開講座や、各地の図書館や博物館などから依頼された屋内公開講座の経験から、社会教育の場における講義を大学で敷衍することはそれほど難しいとは思われなかった。ところがその予測は大きく外れた。大学は講義をすればよい場ではなかったのである。この3年半はその予測外れに対する試行錯誤の連続と言ってよいかも知れない。それを「研究ノート」として開陳することはいささかの意味をもつと思われる。

## 2. 講義と授業

日本における近代高等教育草創の一時期（1869年）ではあるものの「大学」が大学本校、大学東校、大学南校と鼎立していたことはあまり知られていない。講義とは専ら儒学を講じてきた江戸幕府の昌平坂学問所直系語彙で「書ノ義理ヲ講釈スル」<sup>1)</sup> ことであり、学問所の正統嫡子として大学本校は漢学あるいは国学の経読みとその解釈を敷衍しようとした。それに対して江戸末期の種痘所を源流とする大学東校（医学）と、幕府天文方およびその発展形の蛮書調所を継ぐ大学南校は、翻訳（読解）とその応用実践を速成すべく演習・実験・実技を不可欠とした。漢学と国学が葛藤しつつも洋学に対しては攻撃を専らとした大学本校の閉鎖・廃止後、大学東校と大学南校がそれぞれ東京医学校と東京開成学校の称を経て東京大学として統合され、日本の近代高等教育が「法文理医」の形を整えるのは1877年の4月であった<sup>2)</sup>。ここにおいて講義と演習・実験・実技を組み合わせる日本の高等教育の授業スタイルが確立した。「授業」は漢語としては「学業ヲ教ヘ授クル」<sup>3)</sup> ことであったが、近代以降「授産」すなわち「シヨクゲウヲサツケル」と同義ともされた<sup>4)</sup>。周知のように「理医」においてこそ演習・実験の比重は大きいものの、「法文」において授業は専ら講義であって、一般にも大学は講義の場と見做される。これに対して中等初等教育においては授業と称し、そこで講義がおこなわれることはない。授業とは実利を宣布して近代義務教育揺籃期の困難に対処する語であったと推測する、あるいは仮説とすることも可能であろう。

一方、社会教育の場においてなされる講義には、実質上二つに分けることができる。その一は大学などにおける講義内容あるいは学術上の言説等をそのまましくは一般向けに多少かみ砕いた形で提示するもの、その二は学術的基盤とは原則的に関係なく、一定の表現を提供するものの二類型である。後者について別の言い方をすれば、それは一種の芸であり、本質において大道芸と変わるところがない。芸とは現在ではウケ狙いの見世物と理解される面があるが、「芸」の文字そのものは神事としての植樹を示した<sup>5)</sup>。その場が社稷から世俗に降りたった時点においてもそれはなお神にかかわるものであった<sup>6)</sup>。ウケ狙いとは、神を殺

した挙句に客を神に擬し、その消費を企図する顛倒したポピュリズムにほかならない。大学における客員の役割とは、いわば芸の提示とそれによる啓発にあるだろう。ポピュリズムを否定しつついかなる芸が披露できるか、またそれは講義であるのか授業であるのか。今言えることは講義というよりは授業であり、それも教員の学びの過程をさまざまな形で、しかも履修者が理解できることばに開き、「気付いて」もらうことにあると考えている。

ところで実際に教壇に立ってみれば、社会教育の場と大学教育の場とでは、大きな落差が存在した。前者において受講者は個々の興味と向学心をトリガーとして自ら受講料を支払い学習の場に臨むのに対して、後者にあつては大多数が学習内容や成績というより単位そのものの取得すなわち最終的には学歴の取得が目的で、極論すれば講義も授業も内実を問われないのである。たとえば筆者は成績評価方法として、履修者のリアクションと課題レポート類提出を基本とする独自のポイント制を工夫し、着任年の2期から每学期改定を加えながら以下に示すような「評価累計表」を作成してきた。このエクセルの表作成は、質疑応答や指名音読、小演習やエクササイズ、履修・巡検レポート、発表、そして「1冊読み」レポートなどの実績を個別に、また一括して掬いあげ評価したいという動機による。そうして学習を促進する意味で履修生ごとにポイントの獲得状況をその都度示してきた。しかし単位取得の最低点60ポイントに達した途端、欠席してしまうケースがいくつも出現したのである。彼らがそれを平然と行うのは、講義や授業の魅力不足というよりも、その目的意識からすれば当

表1 履修評価累計表

氏名	学籍番号	課題1冊読みリストから、計12冊読みレポート計画											
		期	作品名										rep.提出
注意		*出席だけでは単位が取れない。 *レポートだけでも単位は取れない。											
回	月日	1	2	3	4	5	pt小計					講義・ 巡検 要約・見出エクササイズ 1~2pt あらずび演習 1~3pt 発言/応答/TK 1~2pt 音読 1~2pt 映画レポート 1~3pt *1冊読み発表 1~8pt 自学 (1冊→1) *履修点検・巡検レポ 1~3pt *1冊読みレポート 1~8pt *特別課題  *欠席・遅刻・早退等の届けは適切な書式で提出 上記の提出期限は、事前・当日・翌日まで 以上の届けのない場合は、それぞれ1回につき 1~30のマイナスptとする (履修点に達していても単位がとれない場合があるので注意) *レポート類は所定の用紙に、すべて手書きで記入 (作品書写は400字詰原稿用紙に記入) *提出レポート類は赤字と評価点を記して返却 評価点 (pt) を累計して、履修成績とする *評価点 (pt) の累積状況は適宜開示する *1冊読みは、毎回1冊につき1レポート、計12 レポート提出が原則、3冊以上のまとめ提出は不可 *履修・巡検レポートは、翌週の講義日に提出 2週間以上過ぎの提出は受理しない *特別課題で高得点となった場合、S/A評価とせず *発表:1冊読み課題リストからNo.を選び 1冊につき発表「発表」は単位取得の必要条件 なお、「発表」のNo.作品選択は他人と重複不可  評価 S 90pt ~ 20%以内 A 80 ~ 89pt B 70 ~ 79pt C 60 ~ 69pt X 0 ~ 59pt Z 評価不能	
履修	要約エクササイズ												
自学	あらずび演習												
履修	発言/応答/TK												
履修	音読												
履修	映画レポート												
履修	1冊読み発表												
自学	1冊読み												
履修	履修・巡検レポ												
履修	特別課題												
回	月日	6	7	8	9	10							
履修	要約エクササイズ												
自学	あらずび演習												
履修	発言/応答/TK												
履修	音読												
履修	映画レポート												
履修	1冊読み発表												
自学	1冊読み												
履修	履修・巡検レポ												
履修	特別課題												
回	月日	11	12	13	14	15	*上記は他コースの選択と重複不可						
履修	要約エクササイズ												
自学	あらずび演習												
履修	発言/応答/TK												
履修	音読												
履修	映画レポート												
履修	1冊読み発表												
自学	1冊読み												
履修	履修・巡検レポ												
履修	特別課題												
東京経済大学 履修コース名 2018												●累計pt	

授業の試みについて

然の帰結であった。したがって、なおさらに不可避的な、換言すれば強制的な実作業を伴う講義、すなわち授業こそが重要だと思われたのである。

### 3. 「あらすじ演習」から「要約エクササイズ」へ

担当したのは既に示した4コースであるが、筆者は独自にそれらに共通して「歩く、読む、書く」を標語として掲げ、履修生にその都度示すことにした。屋外授業つまり地理学で言う巡検を中心とすることは招聘時の要請であったが、同等に読み書きにも重きを置くと宣言したのは、それが人間の歴史時代における学習のもっとも基礎的な部分を構成するからである。リテラシーが音声認識を中心としたデジタル領域に離陸したとしても、言語規範は厳然として残るだろう。そうして、これまで「本を読んできたか」否か、いま「本を読んでいるか」否かは、むしろデジタル時代の現在にこそ重みを増すと思われるのである。

以上の認識に関連して各コースのガイダンスの折に、履修希望者に対し独自に作成した「大学生から大人まで基礎読書200」と名づけたリストにもとづいた既読書アンケートを実施してきた。芥川龍之介『羅生門・杜子春』やステューブンスン『宝島』などの文学作品、藤原てい『流れる星は生きている』や比嘉富子『白旗の少女』などのノンフィクション、大岡信編『ファールルの昆虫記』などの科学エッセイをまじえた200タイトルで、そのうち85タイトルは岩波少年文庫に収録されている。青年期に達するまでにその何割かを読んでいたれば、読み書きの基礎力や一定の常識は培われていると推測できる作品群である<sup>7)</sup>。再履修生も少なくないため2018年4月に限り、104名のアンケート回収結果の要点を以下に示す。

表2 「大学生から大人まで 基礎読書200」  
2018年アンケート既読点数

0点	20名	6点	4名	15点	2名
1点	13名	7点	3名	17点	1名
2点	10名	8点	2名	21点	1名
3点	19名	10点	4名	22点	1名
4点	8名	11点	1名		
5点	9名	13点	5名		
		14点	1名		
計	79名	計	20名	計	5名
	約76%		約20%		約5%

表3 「大学生から大人まで 基礎読書200」2018年  
アンケート既読上位10作品

夏目漱石『こころ』	38名
佐野洋子『100万回生きたねこ』	26名
ル・グウィン『ゲド戦記』	24名
宮沢賢治『銀河鉄道の夜』	20名
『竹取物語』	16名
アンネ・フランク『アンネの日記』	15名
ヴィクトル・ユーゴー『レ・ミゼラブル』	13名
ウィリアム・シェイクスピア『ハムレット』	13名
呉承恩『西遊記』	13名
木村裕一『あらしのよるに』	12名

以上のアンケート結果からは、自ら作品を選んで読んだというよりも教科書・教材、課題図書、および映画（アニメ）の影響が大きく働いている様相が見て取れる。そうであるとすればタイトルなど5点以下しか記憶に残らないのが大半を占めるのは、実際は教科書などで読んでいても意識に残らなかった、つまりうわの空で通り過ぎた可能性が大きいと推測すべきであろう。そうでなければ、ゼロ解答が20%近いという数字も理解し難い。

基礎的読み（「基礎読書」）の体験が欠落ないし大きく不足している様子は、提出されたレポート類を一瞥するだけでも明らかであった。「食べれない」などのら抜き言葉、「してる」などのい抜き言葉はもちろんのこと、「きれいくない」「違うくない」などのくない言葉といった喋り言葉そのままを書いてくる例からはじまって、主語の欠落あるいは主語と述語の不一致、敬体と常体の混在、段落分けの不在、文意不明の文等々から、一定の規範的文章に親しみ、それによって訓練された時間はきわめて少なかったと判断せざるを得ない。

筆者はこうした現状を、読書の問題に直結させるのは必ずしも妥当ではないと考えている。現代日本における読書教育は文学偏重で感想文に直結するのが一般的であって、読解そのものや言語規範のトレーニングはむしろ後退するからである。表1に掲げたポイント獲得項目のうち「音読」や「あらすじ演習」などはこうした認識から始められた、まず読む、読んだ内容を確認する、ための試みであった。また表1中央の空白部は、ガイダンス時に示す書目（テキスト）リストから履修生各自が12点を選んで読書計画を立てるための欄である。すなわち「1冊読み」計画欄だが、これについては後に触れるとして、最初に「あらすじ演習」を取り上げて紹介する。

「あらすじ演習」の実際は、まずあらすじ書きの概論を示し、次に筆者が別に用意した読

## 授業の試みについて

み切り用の短篇のリストから履修者各自が1作品を選んでもらい、そのあらすじ書きを宿題レポートとするか、あるいはその授業の場で音読を行い、全員に一定の文字数以内でレポートとして提出もしくは発表してもらうのであるが、ほどなくして問題が明らかとなった。その第一は、後に触れる「1冊読み」レポートにおいても同様であるが、宿題とした場合、インターネット上に書かれたあらすじを利用したと思われる文章が大半を占めるのである。

すなわちそれらは作品の「落ち」ないしは結末、もしくは肝心の場面を欠落させた購買誘導文で、提出された文章も選んだ作品が同じであれば似たものあるいはほとんど同じとなる。原則として400字詰め原稿用紙を指定した手書きレポートであり、書き写したとしても元文がそれなりに通用している文章であるから学習効果がないとは言えないが、自力過程を欠落した結果「筋トレ」にはまったくならないのである（ちなみにこの「筋トレ」の比喩は、読み書き学習の必要性を学生に理解してもらうにはきわめて有効である）。

次に授業中に読み、その場であらすじを書くあるいは発表するプロセスを採用したものの、その作品全体をまとめたといえる例はほとんどなく、「頭でっかち尻すぼみ」スタイルの「あらすじ」に陥ったものが大半であった。読解を持続させる習慣あるいは力が不足しているため、作品の冒頭部分で息切れしてしまい、全体にわたって把握し表現することができないのである。

こうした傾向に対して、作品全体を三分割して要約する三幕構成 Three Act Structure 法を紹介、提示したものの、それは逆に難しいと敬遠されたようで、実際に三部構成であらすじレポートを提出した例は稀であった。

試行錯誤のなかで、現在のところ読み書き力養成のためのもっとも基礎的で効果も反応も明らかであると思われる方法は、新たに「要約エクササイズ」と名づけた作業である。比較的大向こうの成果を目指すトレーニングは基礎力のある一定の者には可能であるが、そうでない限りはエクササイズの積み重ねしか有効な方法はなく、またエクササイズの累積経験がトレーニングジャンプ台を用意することもあり得ると考えている。当然のことながら、これまで述べてきた読みのための作品はすべて「テキスト」であり、履修コースのテーマに沿い、かつ履修生の学習のために質量ともにもっとも効果的かつインパクトが大きいと教員が判断する作品、あるいはその一部分が選ばなければならない。「要約エクササイズ」においてもそれは同然であって、教員の芸の一端はその選択と提示様式に現われるのである。

以下例1に示すのは、担当するコースのひとつ「歩く・読む・書く 地図のメディア学ことはじめ」で実施した「要約エクササイズ」の一例である。A3判縦長の紙の上半分はテキストで、原文から7段落を選び、下半分は原稿用紙でここに段落ごとに40字、つまり原稿用紙の2行以内に文意を要約記入してもらうのである。その際テキストのタイトルや著者名については空白欄をつくっておき、板書したものを履修者が書き取る場所から作業は開始される。また事前に、黙読しながら段落ごと（例1の場合は7段落）に要約上必要と思われ



## 授業の試みについて

る箇所に傍線を引くよう、さらにもっとも重要と思う1語を楕円で囲むように指示しておく。傍線と楕円の2段階を指示するのは、あやふやな傍線だらけになる例も多いからである。

例1上段のテキストは『日経サイエンス』(Scientific American 日本版) 2016年6月号「生物のGPS」(脳内GPS) 特集からの引用である。この要約エクササイズは、授業の冒頭に行くことを原則としている。何故ならば、授業冒頭では通例その前週に履修者各自から提出されたレポート類に赤字と評価点(ポイント)を記入したものを個別返却しつつ、その時点に充てるからである。レポート類返却と累計ポイントの開示を終え、履修者がおおむね要約での各自の獲得ポイント累計を示す一定の時間が必要なため、それをエクササイズ作業に充て、書き終えたところを見計らって、段落ごとに音読者を募るのである。この音読も評価点対象つまりポイントとしているため、応じる者は少なくない。ただしどこに傍線を引いたか、楕円で囲んだ語は何か、どのように要約したかを問い、また必要に応じて特定の語の意味を問う場合もある。例1の場合は第1段落1行目の「GPS」、第7段落2行目の「齧歯(げっし)類」などが質問あるいは説明語に相当する。当該者の答えが適切ではなく、あるいは誤っている場合はほかに解答を募り、答が適切であればそれに対して評価点を与え、補足説明を行う。段落ごとに教員が用意した要約例を示し、すべての段落を終えた後で履修者各自(あるいは隣と解答用紙を交換して)が要約を評価してポイントを記入する。その解答用紙を回収し、次週までに教員が評価をしておして返却するのであるが、ともかくも要約エクササイズの回収まではその日の授業の導入部で、そこから講義や演習、発表などに移ることとなる。

要約エクササイズは、あらずじ演習と比べきわめて短い文章をひとつひとつ作業対象とするため俯瞰性には乏しいものの、確実かつ具体的で、履修生個々の反応も確認しながらすすめられる。テーマに関するエッセンス部分をうまく抄録してテキストとして提示できれば、それにつづく講義ともども当日の授業テーマに対する理解も期待できる。テーマに関しては、一定のガイドラインを示しつつシンプルで基礎的な英文を和訳させる‘Short English Excercise’も併用しているが、これもきわめて有効である。しかしこうしたトレーニングは可能な限り「ボトムアップ」である必要があり、入学初年次における週5回の「基礎読書」(黙読・朗読を併用)および「エクササイズ」類の必修が望ましいと考えている。

## 4. 履修ポイント制と「1冊読み」について

「要約エクササイズ」の実際は以上の通りであるが、ここで履修ポイントの累計について説明補足しておく。履修単位を取得するためには、最低60ポイントの評価がなければならないが、これを全15回の授業で得るには平均して毎回4ポイントを獲得していなければならない。ポイントはすべてレポートや応答など履修者のリアクションに対してそれが適切

な場合付与され、出席そのものはポイントにならないこと、逆に無断欠席や遅刻などの場合はマイナスポイントとすること、などはあらかじめ伝えておく。履修生の多くは、コース前半では累計ポイントが60に届かない予測となるが、表1の中央に書き込む「1冊読み」計画表にもとづき、読了結果のレポート提出がその最良の対応策であることを繰り返し伝え、「読み」を促すのである。レポートを書くに際しての、用紙や書式、文字数、文字の書き方まで、常識と思えることもできれば事前に注意しておいたほうがよい。また「○○について書いてある」などと、肝心な内容を表現するのを面倒くさがって手抜きしたり、実際には読まずに書いたようなレポートも提出される可能性があるから、そのような場合はゼロポイントとなると伝えておく必要がある。

「1冊読み」のテキストリストについて言えば、「大学生から大人まで 基礎読書200」から「基礎読書100」へと半減させ<sup>8)</sup>、現在ではこれまで示したテキストをできるかぎり外し、履修生の数の「35」タイトルにまで選択肢を絞った(例2)。それは、選択の幅を広くしていると、明らかに読みの容易と思われるテキストに集中してしまう現象が現われたからであり、また再履修生も少なくないからである。

大学生として、50年先まで生きる者として、切実に必要であろうと判断する「知」の含まれる作品のいくつかを選び、限られた時間のなかでも是非それらに触れてもらいたいと思

例2

1万年の現在読書35				2018/09/20版	
A	まず読む		B	もうひとつ読む／視聴する	映画
1	『穴』	ルイス・サッカー	講談社文庫	L・サッカー『道』(講談社)、	映画『穴 Holes』(アイズビー)117分
2	『あやとり』	石牟礼道子	福音館文庫	石牟礼道子『苦海浄土』(講談社文庫)『椿の海の記』(河出文庫)	
3	『イシ』	北米最後の野生インディアン	シブドーラ・クロウ	岩波現代文庫	熊本孝『カナダ・インディアンの世界から』(福音館文庫)
4	『いのちの食べかた』	森達也	角川文庫	エリック・シュローサー『ファストフードが世界を食いつくす』(草思社文庫)	映画『いのちの食べかた』192分
5	『海はどうしてできたのか』	藤岡俊太郎	講談社ブルーバックス	藤岡俊太郎『山はどうしてできるのか』『川はどうしてできるのか』(講談社ブルーバックス)	
6	『王女マメリア』	ロバート・ダール	ロバート・ダール	ハヤカワミステリ文庫	R・ダール『あなたに似た人』I・II(ハヤカワミステリ文庫)『チョコレート工場』(早川書房)ほか
7	『わたちの避難所』	垣谷美雨	新潮文庫	野口健『震災が起きた後で死なないうために』(避難所にテント村)という選択(早川書房)	
8	『科学、考えもなかったAIの素』	松浦雅夫	講談社ブルーバックス	板倉聖重『科学的とはどういうことか』『たずね博士の科学教室』(阪社)	
9	『漢字百語』	白川静	中公新書	白川静『中国の神話』(中公文庫)、福永武彦『古事記物語』(岩波少年文庫)	
10	『饗宴』	フラン	岩波文庫	フラン『国家』上・下(岩波文庫)	
11	『攻撃一撃の自然誌』	コンラート・ローレ	みすず書房	コンラート・ローレ『ゾロモンの指環—動物行動学入門』(ハヤカワNF文庫)	
12	『墓を打つ女』	ジャン・サ	早川書房	ジャン・サ『天安門』(早川書房)	
13	『ゴリオ爺さん』	オル・ド・バルザ	光文社古典新訳文庫	バルザック『純愛』(早川書房)『谷間の百合』(新潮文庫)	映画『ゴリオ爺さん』100分
14	『サピエンス全史』	ユヴァル・ノア・ハラリ	河出書房新社	ハラリ『サピエンス』(早川書房)	
15	『人類と気候の10万年史』	過去に	中川 毅	講談社ブルーバックス	鈴木光太郎『心はどのように進化したのか? 狩猟採集生活が生んだもの』(ちくま新書)
16	『生物と無生物のあいだ』	福岡伸一	講談社現代新書	福岡伸一『できそこないの男たち』(光文社新書)	
17	『ソングライン』	ブルー・チャトウ	英治出版	B・チャトウ『バタゴニア』(河出文庫)	
18	『第九軍団のワシ』	ローズマリー・サトウ	岩波少年文庫	R・サトウ『ワシ』(岩波少年文庫)	映画『第九軍団のワシ』114分
19	『田中正造伝』	クネス・ストロング	晶文社	佐江 衆一『田中正造』(岩波ジュニア新書)、荒畑寒村『谷中村滅亡史』(岩波文庫)	映画『寒村の伝』115分
20	『デカルトの旅/デカルトの夢』	田中仁彦	岩波現代文庫	R・デカルト『方法序説』(岩波文庫)	
21	『TN君の伝説』	なだいなだ	福音館文庫	なだいなだ『権威と権力—いつことをかきける原理・きく原理』(岩波新書)	
22	『父さんの銃』	ヒネル・サレム	白水社	崔善愛『ショパン 花束の中に隠された大砲』(岩波ジュニア新書)	
23	『納棺日記』	青木新門	文春文庫	青木新門『それからの納棺夫日記』(法蔵館)	映画『おひげ』139分
24	『バルザックと小さな中国のお辞儀』	ダイ・シー・ジェ	ハヤカワepi文庫	イー・コン・リー『さすちろ者たち』(河出文庫)	映画『小さな中国のお辞儀』126分
25	『ピリョー・ジョーの大地』	カレン・ハス	理論社	ジョン・スタインベック『怒りの葡萄園』(新潮文庫)	映画『怒りの葡萄園』129分
26	『ファーブルの昆虫記』	大岡信博	岩波少年文庫	山田吉彦・林達夫訳『ファーブル昆虫記』1~10(岩波文庫)	
27	『不死身の特攻兵 軍神はなぜ』	湧上尚史	講談社現代新書	大貫健一郎・渡辺考『特攻隊隊長 船越英は地獄を見た』(朝日文庫)	
28	『ベトナム難民少女の十年』	トラム・ゴクラン	中公文庫	福澤徹三『東京難民』(光文社文庫・上下)	映画『東京難民』130分
29	『べつつの言葉で』	ジュンバ・ラヒ	新潮クレストブックス	ベルンハルト・シュルツ『朝読者』(新潮クレストブックス)	映画『夢を継ぐ人』144分
30	『ぼく、カズの名にやっ!』	ジャンク・ギヤント	徳間書店	L・サッカー『ド・レマがえちやっ!』(講談社)	
31	『キヤノコドーム』	津島裕子	講談社文芸文庫	眞並恭介『牛と土 福島、3.11その後。』(集英社文庫)、いとうせいこう『想像ラジオ』(河出文庫)	
32	『利己的な遺伝子』	リチャード・ドーキ	紀伊國屋書店	ライオナル・ワトソン『グー・ネイチャー—悪の博物誌』(筑摩書房)	
33	『ワイルド・スマン』	ユン・チアン	講談社+α文庫	ユン・チアン『マオ 誰も知らなかった毛沢東』上・下(講談社)	
34	『忘れられた日本人』	宮本常一	岩波文庫	柳田國男『木綿以前の事』『遠野物語』(山の人)』(岩波文庫、青空文庫)ほか	
35	『わたしを離さないで』	カズオ・イシグロ	ハヤカワepi文庫	カズオ・イシグロ『わたしは孤児だったころ』(ハヤカワepi文庫)	

## 授業の試みについて

ったからでもある。気候や地形、生物や人類学、震災や避難所、中国と日本に関する作品を特徴とするのはそのためである。逆に言えば、筆者がヒトの現在と未来に関して切実に学んだもの、あるいは深甚な啓示を受けたものだけを選び、それを鮮やかに提示すること、あるいは黙示して気付いてもらうことが芸であり、授業なのである。

リストのテキストに対応した映像作品がある場合はそれを行末に示しているが、授業中にこれを視聴してもらってそのレポートを求める場合もある。また任意で文字作品と映像作品との比較レポートを提出して評価してポイントともしている。ただし映像作品に重きをおくつもりはなく、あくまで読み書きトレーニングの一環ないし導入として位置付けている。

読み書きトレーニングに関連して有効であったと思われる授業としては、以上のほかに、図書館のグループ学習室を利用し、ゲスト講師を招いて行った「読書へのアニメーション」がある<sup>9)</sup>。これは大学の授業としてはおもに図書館司書養成コースなどで行われているものであるが、3時間つづきのコース（「表現と批評」）を利用して、全員が同一テキストを黙読した後、「あらすじ」の断片が書かれたカードを各自に籤引で配当しストーリーの流れに沿ってあらすじが完成するよう一列に並びなおしてもらい、また各自が本屋の店員となったつもりでその作品の宣伝用 pop をつくりどの pop がすぐれているかを全員で投票するなど、身体的行為を伴うグループ学習である。さらに、筆者が出版にかかわってきた関係上、「判」と「版」の区別から本のページの具体的なめくり方までを示す「モノとしての本の意味・本のレッスン」や、「校閲・校正演習」も行った<sup>10)</sup>。そうして最後の授業をC・S・ルイス著『ライオンと魔女』を素材に「リアル世界とファンタジー世界の反転」に触れた「左様ならば」でしめくくった。

## 5. まとめと謝辞

以上、独断無手勝流ながら本学着任以降4年間の試行錯誤の一端を披露した。まことに教えることは学ぶこと‘Homines, dum docent, discunt’（A・L・セネカ）であった。「芸」についてはすでに触れたが再確認しておくとするれば、トレーニング類の負荷と併せ、自らの学びの現在を可能な限りフレッシュな切断面として、あるいは血色の乾かぬそれとして履修生の脳裡に刻印できれば、それは芸としてまた授業として目的を達し得たと言えるだろう。

客員任期満了を前に、こうした学びの場を与えてくださった本学コミュニケーション学部前学部長川浦康至先生をはじめ学部の先生方、職員の方々、またゲスト講師として授業にお力添え下さった方々、そうして「基礎読書」に深い理解を示され、2016年度7月から「岩波少年文庫」シリーズを配架してくださった本学図書館の方々に、厚く御礼申し上げる。また拙い芸と強引な誘導に付き合ってくれた履修生たちにも忘れず感謝しておきたい。

## 註

- 1) 大槻文彦『言海』1889年, p.168。
- 2) 国立教育研究所『日本近代教育百年史』第三卷学校教育1, 1974年, pp.272-279, pp.800-802。
- 3) 大槻文彦『言海』1889年, p.498。
- 4) 湯浅忠良『広益熟字典』画引之部, 1874年, p.111。
- 5) 白川静『字通』1996年, pp.413-414。
- 6) 折口信夫「日本芸能史六講」『折口信夫全集』21, 1996年, pp.20-21。
- 7) (無記名)「大学生でも, おとなでも, 基礎読書200」(リスト)『季刊 Collegio』No.62, Summer 2016年, pp.60-63。
- 8) (無記名)「基礎読書100」(リスト)『季刊 Collegio』No.65, Summer 2017年, p.55。
- 9) 青柳啓子「大学生の主体的な読みを引き出すには」『季刊 Collegio』No.69, Autumn 2018年, pp.58-66。
- 10) 2016年10月5日から12月7日の間10回にわたって日本テレビ系で放映された石原さとみ主演のドラマ「地味にスゴイ! 校閲ガール・河野悦子」。現在ではdvd作品として視聴ができる。原作は宮本あや子『校閲ガール』(2014年初版)。授業ではdvdの第1話を視聴(巡検には, 偶々国分寺付近のロケ地も含まれた)した後に, 現役の雑誌校正者から話を聞き, さらに「まちがいがし」の時間を設けた。ただし授業の冒頭において, 以下の7段落の文章(筆者のオリジナル文)をそれぞれ40字(原稿用紙2行以内)にまとめる「要約エクササイズ」を行い, 予備知識の導入とした。

- ① 校正とは、出版や放送・放映、広告や看板などの公示、インターネットでの発信を含めたすべてのコミュニケーション・メディアにおいて、その表現形式(表記)と内容を確定する最終段階におけるチェック・プロセスのことである。
- ② 校正者の仕事はおもに表記に間違いがないかを確認することであるが、多くの場合原稿の誤認を正したり、記載の曖昧な部分について再確認をすることも必要となる。表記よりも内容に踏み込んだ領域については「校閲」と呼ぶことがある。校正者にもっとも必要なのは一般常識であるが、懐疑的もしくは探求的な資質も重要である。
- ③ 大きな出版社や新聞社では編集部のほかに、印刷前の最終チェックを専門に行う校正部ないし校閲部を社内にもち、そこで社員もしくは契約したフリーランスの校正者などが全印刷物の校正と校閲を受け持つことが多い。
- ④ 中小の出版社などでは、編集部が担当出版物ごとに校閲、校正を行うか、あるいはその作業を外注するのが一般的である。社の内外での校正を区別して、「内校(うちこう)」「外校(そとこう)」と言うことがある。フリーランスの編集者や校正者のための養成講座は数多く開かれている。
- ⑤ 印刷出版物の校正の手順は、入力原稿を出力した「校正紙」をチェックすることから始まる。校正紙を「ゲラ」と言うが、ゲラとは元来活字を並べる枠箱を意味していた。レイアウトされていない文字だけの校正紙は「棒ゲラ」と呼ばれる。
- ⑥ 校正は一回目を初校といい、修正や疑問の箇所がなくなる「校了」まで、二校(再校)、三校と校正担当者を交代しながら繰り返すが原則である。最後の校正を「念校」と言うことがある。訂正された状態を確認せず、訂正指示のみで校正を終えることを「貫了」と言う。
- ⑦ 校正を軽視するとメディアに数多くの、または致命的な誤記が発生する。そのため『論語』をもじった「校正畏(おそるべし)」の警句がある。致命的な誤記は人名や社名、地名などの固有名称や、数値表記に発生しやすい。最近ネットなどの根拠や責任の明らかでないメディアを引用しあるいは出典とした出版物をよく見かけるが、これも校正軽視の一端である。